航空ファン
KOKU-FAN

ワイドカラー
WIDE COLOUR
空技廠
彗星艦爆



☆特集☆
カラー特集；F-16A軽戦 と EA-6B
ロッキードP-3Cのウェポンシステム
日本の秘密航空機 “秋水” と “泰山”

'75 11
NOVEMBER

BUNRIN-DO JAPAN

$2.50

クローズ・アップ　F-16A

——セシルフィールドのデモ飛行から

(Photo by R.E. Kling)



General Dynamics F-16A (72-1568), taxiing after show, NAS Cecil Field.



F-16A turning toward RF-4C

前号につづいて，このほどフロリダ州のセシルフィールド海軍航空基地でデモ飛行を行なった米空軍の新型機。今回はF-16Aの原型1号機(72-1568)のクローズ・アップ。

前ページは飛行ショーを終えて着陸，タキシング中。写真上はRF-4Cとの編隊飛行，写真下は離陸，右は垂直上昇からスロー・ロールに移るところ。



Take off



Vertical climb before starting slow rolls

(Photo by R. E. Kling)



前ページと同じくセシルフィールドのF-16A。離陸後，車輪がまだ完全に引込まないうちに身軽に垂直上昇に入るところ。写真下は脚を引込めて場内一周。

Zoom-up over NAS Cecil Field, Fla.



ロックウェル　T-2C　バックアイ



ここのT-2Cバックアイも，これもとフロリダ州のセシルフィールド海軍航空基地でデモ飛行を行なった各機．写真の機体は第4練習飛行隊（VT-4）の所属機で，ショーを終えてタキシング中．

(Photo by R.E. Kling)

T-2バックアイには初期の単発型であるT-2AからギリシャTo向けに作られたE型まで5つの型があるが，米海軍が現在使用しているのは双発となったT-2Bとそのアビオニクス強化型であるT-2C。C型では，エンジンもB型のP&W J60を強力なJ85-GE-4に換装しており，戦技訓練を含めたあらゆる訓練に使われている。写真左は第4訓練飛行隊（VT-4）所属機，下は第23訓練飛行隊（VT23）"シティ・オブ・サンアントニオ"の所属機である。



T-2C Buckeye of VT-4, hook down, NAS Cecil Field, Fla.



T-2C Buckeye of VT-23 "City of San Antonio", NAS Jacksonville, Fla.

第142飛行隊のトムキャット

(Photo by R.E. Kling)

フロリダ州セシルフィールドで撮影した第142戦闘飛行隊（VF-142）のF-14Aトムキャット。同飛行隊は西海岸のミラマー海軍基地で編成された部隊。



F-14A Tomcat of VF-142, NAS Cecil Field, Fla.



⬆ F-4N of VF-101 and F-14A of VF-142, NAS Cecil Field, Fla.

米海軍のF-14トムキャットは，すでに150機近くが引渡されており，年内には180機を越えることになる。編成予定の14個飛行隊のうち，半分の7個飛行隊が編成を終えようとしており，まもなく“トムキャット時代”が到来する。写真上はセシールフィールド基地のF-4N(手前，第101戦闘飛行隊所属機）と第142戦闘飛行隊のF-14Aの機首。写真下は同機のテイル・マーキング。第142戦闘飛行隊（VF-142）はミラマー基地で編成を終り，来年から第143戦闘飛行隊（VF-143）とともに空母アメリカに配属されることになっている。

Tail markings of VF-142's Tomcat.



カラー特集

グラマン　EA-6B　プラウラー



Grumman EA-6B Prowler of VAQ-132 taxiing at NAS Jacksonville, Fla.
(Photo by R. E. Kling)



EA-6B Prowler of VAQ-130



EA-6B Prowler of VAQ-129

グラマンA-6イントルーダー改造の電子戦型は，垂直尾翼上端に大きなレドームをつけたEA-6Aが最初であるが，同機のデータをもとに本格的な電子戦用機として開発されたのがEA-6B。コクピットは2座席から4座席となり，胴体は大幅に延長され，ニックネームもイントルーダーからプラウラーと変った。すでに40機以上が引渡されて，4個飛行隊以上が編成されている。15ページと上の2枚は第130戦術電子戦飛行隊（VAQ-130）所属機，次ページ上は第129，同下は第135電子戦飛行隊の所属機である。第135は空母レンジャーに配属されている。





EA-6B Prowler of VAQ-133

（上）第133戦術電子戦飛行隊（VAO-133）所属のEA-6Bプラウラー。セシルフィールド基地で風防を開いて滑走中のもの。乗員席は並列座席が前列に２座席ずつ。パイロットが一人，ほかの３座席は電子操作員席である。

（下）同じくVA-133のEA-6B。同飛行隊は，空母ジョンF ケネディの配属部隊である。上の写真の機体は主翼下の内側パイロンに増槽を吊しているが，下の写真の機体は外側パイロンにALQ-99音声妨害装置のポッドを吊している。



EA-6B Prowler of VAQ-133



グラマン　EA-6A　イントルーダー

イントルーダー改造の最初の電子戦専用機EA-6A。この機体も主翼下の外側パイロンにノイズ・ジャミングのALQ-99装置を装備している。海兵隊の第2海兵混成偵察飛行隊(VMCJ-2)の所属機で、セシルフィールド海軍基地で撮影。

(Photo by G.L. King)



EA-6A Intruder of VMCJ-2, NAS Cecil Field, Fla.

世界のジェット・エアライナー ⑤



⬆ DC-9-50



⬆ NASAでリファン・エンジンのテストに使われているDC-9

⬇ 東亜国内航空のDC-9-41



初飛行したマクダネル・ダグラス　YC-15

McDonnell Douglas YC-15 AMST makes first flight.

米空軍の新型中距離STOL輸送機（AMST）候補として試作されたマクダネル・ダグラスの1号機が，去る8月26日，カリフォルニア州ロングビーチのMD社飛行場で初飛行した。写真は初飛行で離陸する同機。初飛行は2時間26分にわたって行なわれ，最高速度は260kt（約482km/h），高度18,000ft（5,486m）に達した。飛行後はエドワーズ空軍基地に着陸した。





〔上・下〕YC-15の試作1号機は，8月5日にロングビーチの工場でロールアウト，関係者に公開された。写真上と下はロールアウト当日のもの。横から見ると太くて短い胴体に大きな後退角つき矩形翼の垂直尾翼が目立つ。垂直尾翼には，広い面積の2重舵面のラダーが付いており，上端にはT型配置に水平尾翼。胴体下方両側のスポンソンに収められた降着装置はC-141のものを改造したダブル・タンデムの主車輪付き。首車輪はDC-8のものを採用しており，コクピットはDC-10のものを応用したもので，正・副操縦士の2席と予備として機関士席を設けてある。機首両側に大きな二つの窓を設けてあるが，これはパイロットの足もとの位置にあたり，短距離離着陸や低空での物量投下のときの下方視界のためである。

First YC-15 AMST at publid display area of McDonnell Douglas Corp., Long Beach, Calif.

YC-15の主翼は後退角を減らすためにスーパークリテカル翼型を採用している。主翼下面に見える四つの大きなふくらみは，後縁内側に取り付けられているダブル・スロッテッド・フラップのアクチュエター格納部。このフラップは最大開度52度の大面積のフラップで，これに主翼の前方に配置されているエンジンの排気流を吹きつけて，揚力の増加をねらおうというもの。エンジンの排気ノズルは特殊な形状のものとなっており，高温の燃焼ガスにバイパス空気流をまぜあわせて，フラップに当る排気の温度を低くする機構である。YC-15の1号機はエドワーズ空軍基地で飛行テストに入るが，6回目の飛行を終えると一時テスト場をアリゾナ州のユマ基地に移し，11月にふたたびエドワーズに帰って，2号機を加えて飛行テストをつづける。





MRCAの原型3号機が初飛行

Third MRCA prototype makes first flight

8月5日，ランカシャー州のBAC軍用機部門ワートン飛行場で初飛行したMRCAの原型3号機(03)。初飛行はデビッド・イーグル テスト・パイロットの操縦で1時間6分にわたって行なわれた。03号機は最初の練習型の原型で，これまでの原型01，02の2機とは異なってカムフラージ迷彩の塗装となっている。03号機はマンチングに移され，01，02号機とともに飛行テストに入ることになる。



ブラジル空軍のMB326

Embraer MB 326GB Xavante of Brazil A.F.

ブラジル空軍が装備しているMB.326GBサバンテ練習・攻撃機。アエルマッキMB.326をブラジルのエンブレア社でライセンス生産したもので，同国空軍では110機を装備して，軽攻撃のCOIN機部隊4個飛行隊を編成している。COIN機の部隊は，ほかにB-26インベイダー，AT-33，AT-37各機の飛行隊がそれぞれ1個飛行隊ずつ計3個飛行隊。MB.326GBはCOIN機部隊の主力機である。なお同機のブラジル空軍の制式名称はAT-26。





アラブ首長国連邦に納入されたC-130H ⬆

C-130H for the United Arab Emirates

このほどアラブ首長国連邦に納入されたC-130Hハーキュリーズ。同連邦は2機のC-130Hを購入，国際貨物輸送および国土建設に投入する。これでC-130は各型を含めて1,315機余が売れ，世界の37カ国で運航されている。



TriStar assigned to Cathay Pacific Airways for the first time.

キャセイ航空向けのトライスター1号機 ⬆

キャセイ航空が購入した航続距離延長型のトライスター1号機。同機は9月から香港／東京路線に就航する。

新型ビジネス機ファルコン50 ⬇

ファルコン30ビジネス機の3発型ファルコン50の原型1号機。乗員2，乗客10人乗り。まもなく初飛行の予定。

First prototype of Dassault Breguet Falcon 50





MiG-15, B-29 displayed at the 5.16 Memorial Plaza, Seoul

2機が追加されたソウルの 5.16広場航空機展示場

韓国のソウル市ジョイ島の5.16広場に展示されている航空機は、このほどMiG-15とAn-2の2機が追加されて，全部で11機となった。写真上はMiG-15（左）とAn-2。MiG-15は1960年8月3日に北鮮から脱出して韓国の東海岸にある東草飛行場に不時着したもの。左手に映っているのは共産軍の野砲である。この2機のほか、現在同広場に展示されている飛行機は，B-29, B-26, F-86D, F9J, F-51, T-6, L-19, C-124の各機である。写真下は参観者でにぎわう同広場。光復30周年と韓国戦争ぼっ発25周年を迎えて，同広場では8月11日から11月10日まで特別記念展示会を開催中であり、日に2万人の入場者を数えている。





新マークが決った千歳の第302飛行隊

New eagle-marked F-4EJ of JASDF 302 Sqn, Chitose

百里基地の第301飛行隊につづいて，千歳基地で編成されていた航空自衛隊の二つ目のF-4EJファントム部隊，第302飛行隊の編成が終え，このほど新しい部隊マークが決った。垂直尾翼に描かれているのがそれで，北海道に住む尾白わしをモチーフに，"302"に図案化したもの。"3"の翼はブルー，"0"の尾翼は白，"2"の首が赤で，クチバシと爪は黄である。



Phantom FGR.2



カニングスビイ空軍基地のFGR.2
FGR.2 at RAF Coningsby. (Photos; Inter-Air Press)



第111飛行隊のＦＧＲ．２と第29飛行隊のＦＧＲ.2.（ＦＧＲ.2 of 111ＳＱ and 29ＳＱ）





エプロンで翼を休める第111飛行隊のＦＧＲ.2.（ＦＧＲ. 2 of 111ＳＱ）



勢ぞろいした第29飛行隊と第111飛行隊のFGR.2。
(FGR.2 of 29 and 111SQ in line-up)



胴体下にバルカン砲ポッドを装備した第111飛行隊のFGR.2。
(FGR.2 of 111SQ)



サイドワインダーＡＩＭ-9Ｄを装備中の第29飛行隊のＦＧＲ.２。左後方にスパローIIIが見える。(Re-arming an FGR.2 of 29SQ)

第29飛行隊のＦＧＲ.２。実用転換訓練中のシー
訓練用サイドワインダーを装備中である。



ベントウォーター基地のF-4D



USAF F-4D at RAF Bentwaters.
(Photos; Inter-Air Press)



イギリスのベントウォーター空軍基地には現在米空軍第81戦術戦闘連隊（81ＴＦＷ）第91、92戦術戦闘飛行隊（91、92ＴＦＳ）の２飛行隊が所属している。写真は訓練飛行に出発前のＦ-4D。（Ｆ-4D of 81ＴＦＷ）



訓練飛行を終え着陸するF-4D。胴体下面にバルカ
砲ポッドとアクティブECM(AN/ALQ-119)を装
している。
(F-4D of 81TFW. with Vulcan canon and EC
pod.)





編隊離陸するF-4D。





F-4Dの胴体下に装備されたアクティブECM(AN/ALQ-119)。



航空自衛隊 浜松基地





JASDF Iwg,Hamamatsu AB.

浜松北基地の第１航空団には現在 T-33A を使用する第33教育飛行隊と F-86F を使用する第１教育飛行隊が所属していてパイロットの教育を行なっている。写真は訓練飛行に向う第33教育飛行隊のT-33A。(T-33A of 33T Sq 1Wg)







編隊離陸する第1教育飛行隊のF-86F。
(F-86F of 1TSq 1wg)



訓練飛行に向う第1教育飛行隊のF-86F。





浜松基地は“ブルーインパルス”曲技チームのホームベースになっているが、このチームは第1航空団戦技研究班といい、戦闘機が最大の能力を発揮できるように飛行訓練を実施している。上の写真と次ページはダイヤモンド編隊で飛行する“ブルーインパルス”。
(F-86F of "Blue Impulse")




894
812
809

FLY-IN'75から……



去る8月16、17日の両日埼玉県桶川飛行場において日本自作航空機協会主催のFLY-IN'75日本自作航空機協会全国大会が台風の影響で天候不順の中全国から20数機が参加して行なわれた。その参加機の中から何機か紹介しよう。写真は展示飛行するおなじみスバルプレーン



これは自作機ではないが当日展示飛行を行なった日本に1機だけ残っているエアロンカ7C。



初めて地上を離れた"白トンボ"号。飛行機用部品は一つも使われていないとのこと。



台風のため滑走路上にたまった水に足をとられ逆立ちした"しおからとんぼ"号。



滑走路に向う"MR. SMOOTHIE"号。



エンジン始動中の"北の星"号。

ふぉーとにゅーす



エールフランス向けのコンコルド量産3号機。同機は路線慣熟飛行のために、このほどパリ～南アメリカ～ニューファウンドランド間の飛行を行なった。



通常の消火作業では手に負えない山火事の消火に活躍する米空軍予備部隊のC-130。



ロンドンのグリニッチにある、イギリス海軍幹部学校に向ってテームズ河をのぼってゆく征海艦「フェアレス」のフライトデッキに着陸する、イギリス海軍に採用されるハリアー。



8月17日の航空日のショーに展示飛行を行なったスホーイSu-9とパイロットたち。(TASS)



流氷観測に活躍している双発タービンヘリ"Mi-2"アーチャイカ"。(TASS)



これも飛行を終えたパイロット。(TASS)



警戒警報の発令で出動する、ソビエト西国境守備隊。機体はMi-4。(TASS)





このページ上はレニングラード空港におけるTu-154。中はTu-154のコックピット。下の写真はシェレメチェフ空港で翼を休めるIl -62旅客機。（Photos by TASS)



スナップだより



厚木基地を離陸する第90対潜哨戒飛行
属のP-3A。尾翼のライオンのマークが
い。(三鷹市　K. Tokunaga)

8月初め横田基地に飛来した米海軍第52輸送飛行隊所属のC-118B(東京都　田中孝穎)。

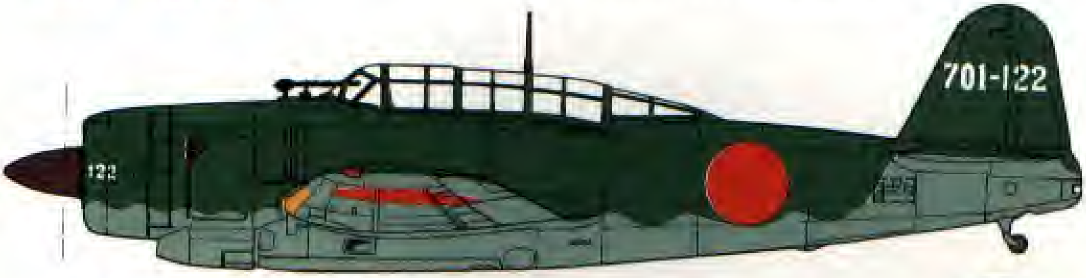


横田基地に飛来した米空軍航空通信軍
属のT-39A(昭島市　山内裕之)。

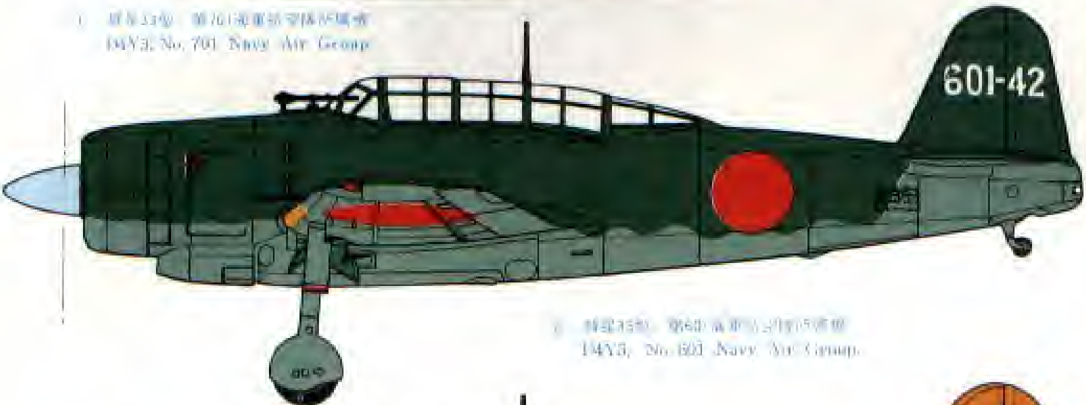


KUGISHO CARRIER DIVE BOMBER "SUISEI" (D4Y3～D4Y4)

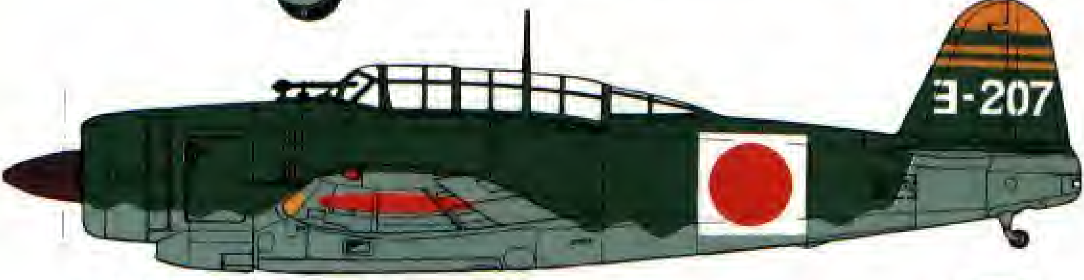
ワイドカラー
WIDE COLOUR



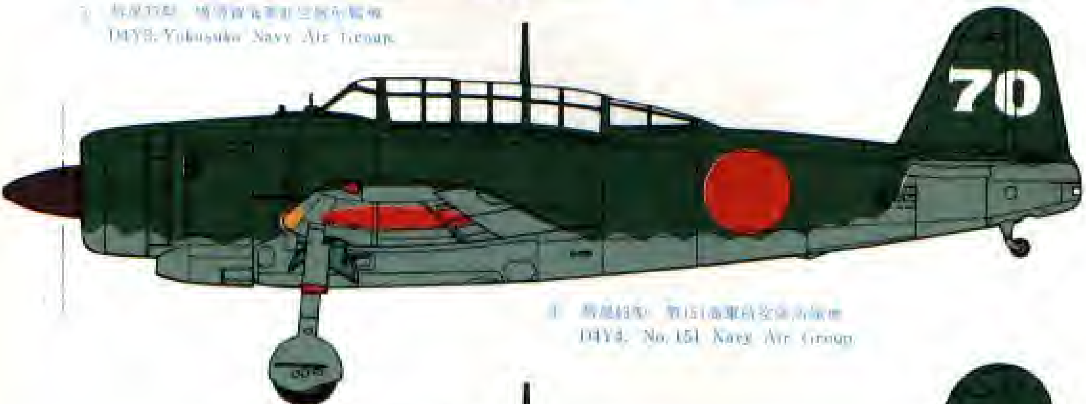
1　彗星33型　第701海軍航空隊所属機
D4Y3, No. 701 Navy Air Group



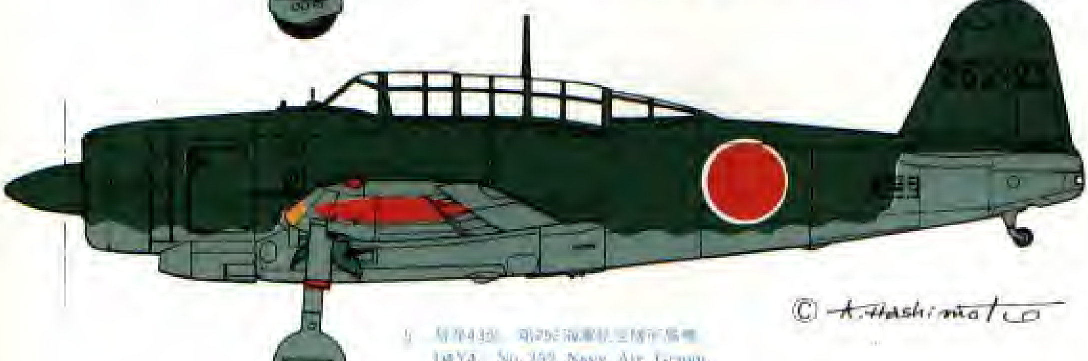
2　彗星33型　第601海軍航空隊所属機
D4Y3, No. 601 Navy Air Group.



3　彗星33型　横須賀海軍航空隊所属機
D4Y3. Yokosuka Navy Air Group.



4　彗星43型　第151海軍航空隊所属機
D4Y4, No. 151 Navy Air Group.



© A.Hashimoto

5　彗星43型　第252海軍航空隊所属機
D4Y4, No. 252 Navy Air Group.



カーチス　SB2C-3～5　ヘルダイバー

CURTISS　SB2C-3～5　HELLDIVER

カーチスSB2Cヘルダイバーは，8月号の本欄でもいちど紹介したが，これはその続編。3型以降の各型を中心にご紹介しよう。写真は1944年から戦場に登場したSB2C-3。この3型が登場するころには，ヘルダイバーは老兵のSBDドーントレスや戦闘爆撃機のF4Uに代って，米海軍の急降下爆撃機の主力になっていた。



⬆SB2C-3 Helldiver in ocean flight

【上・下】同じくSB2C-3ヘルダイバー。SB2C-3はライト・サイクロンR-2600-20エンジン（1,900hp）装備で，-1の3翅プロペラに代ってカーチス・エレクトリックの4翅プロペラとなった。武装は主翼に20mm機関砲2門のほか後席に7.62mm旋回機銃が2挺。

上の写真では前後席の風防が開かれており，下の写真では閉じられている。2枚の写真を比較するとその開閉状態がよくわかる。

⬇SB2C-3 Just built up





↑ XSB2C-1　↓ SB2C-1

カーチス SB2C ヘルダイバー　CURTISS SB2C HELLDIVER

2次大戦の米海軍主力艦上爆撃機カーチスSB2Cヘルダイバー。8月号のA-25Aシュライクにつづいて、ふたたびカラーで特集しました。
『上』1940年12月18日に初飛行したヘルダイバーの原型XSB2C-1。ライトR-2600ダブルサイクロン・エンジン（1,700hp）装備。同機は40年12月から翌41年1月にかけて飛行テストがつづけられたが、安定性や操縦特性などに問題が続出した。2月9日、着陸進入時にエンジンが停止して、滑走路近くの凍りついたゴミの山に激突、主翼後方付根の部分で胴体が二つに割れて大破したが、修復されて、5月6日に飛行テストを再開している。［下］ヘルダイバーの最初の量産型SB2C-1。C-1の生産は1941年から開始され、200機が造られた。





⬆SB2C-4E

〔上〕SB2C-3につづいて生産されたSB2C-4は，主翼下に5インチ・ロケット弾8発か1,000ポンドまでの爆弾を装備できるようにしたもので，さらに右主翼下に小型のレーダー・セットが積めるようになったのがSB2C-4Eである。写真はそのSB2C-4E。主翼下にロケット弾の吊下げ装置が見え，右翼下にはレーダー・セットを吊している。写真の機体は予備役空軍に装備された1機で，戦後の1948年8月29日の撮影。国籍記章の帯が，1947年から制定された新しいものになっているのに注意。



⬆SB2C-4 Helldivers flying over Mr. Fuji heading for Tokyo

〔上〕両主翼下に増槽を吊して，富士山を背景に飛ぶSB 2C-4。終戦半月前の1945年7月30日の撮影。東京北西近郊の飛行場攻撃に向う第16航空大隊の各機である。このころは，どん重な艦爆でも，このようにゆうゆうと編隊を組んで敵地日本本土上空を飛ぶことができた。爆弾倉には約 1,000ポンドの爆弾を格納している。

〔下〕SB 2C-4E。手前の2機の白っぽい塗装の機体は，大西洋方面での運用のために採用された低視度迷彩塗装機で，背面がダークガルグレイ，下面をインシグニアホワイトに塗ったものである。カーチスでは，CB 2C-4と-4Eを全部で 2,045機生産している。

⬇SB2C-4E Helldivers in low visibiljty paint scheme adopted in 1944 for Atlantic theater use







飛行中のSB2C-4。-4型は主翼下に5インチ・ロケット弾8発または爆弾1,000-lbを装備できるようにしたもの。主翼に20mm機関砲2門を固定装備しているほか，後方座席に2連装の7.62mm機関銃をそなえている。写真では射手を兼ねる後席の観測員が，連装機銃でねらいをつけている。



⬆SB2C-5 while extending its wing, Cleveland NAS, Aug 1947

〔上・下〕主翼を展張中のSB2C-5。-5は-4型の搭載燃料をふやしたもので，終戦の年の1945年2月から生産が始まり，カーチスでは970機が作られている。写真上は戦後の1947年8月，クリーブランド海軍基地で撮影したもの。プロペラ・スピナをはずしている。
写真下も終戦直後にアメリカ国内で撮影したもの。

⬇Side view of SB2C-5





⬆SBW-4E Helldiver built by Canadian Car Foundry

〔上〕SBW-4Eヘルダイバー。SBW-4Eはカナダのカナデアン・カー・アンド・ファウンドリー社製のヘルダイバーで，カーチス製のSB2C-4Eと同じ型である。写真は終戦翌年の1946年の撮影で，海軍予備役空軍のマークをつけた機体。

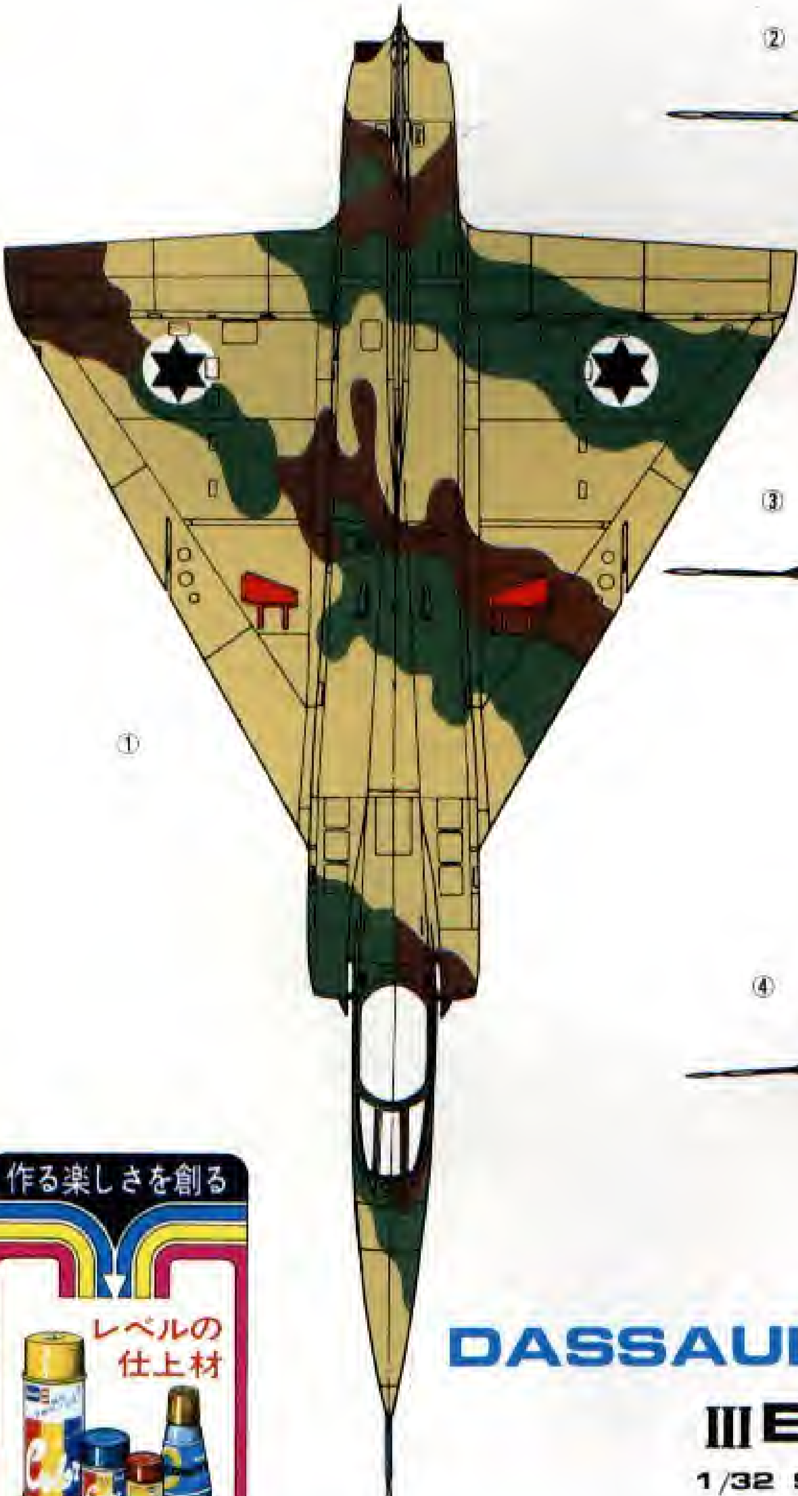
〔下〕SB2C-1を改造した水上機型のXSB2C-2。1943年に，SB2C-1の1機が双フロートをつけて改造され，テストされている。

⬇XSB2C-2 float-plane converted from SB2C-1

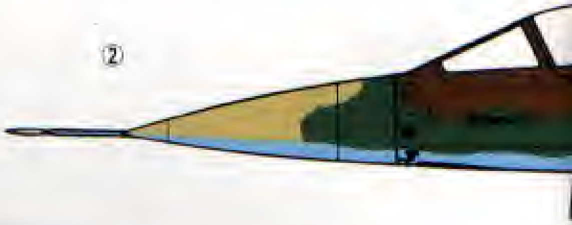


ダッソー・ミラージュIIIE～5Jのカムフラージュ

①



②



③



④



DASSAULT MIRAGE IIIE～5J

1/32 SCALE KIT

〔ミラージュ5の主なデータ〕
全幅8.22m，全長15.85m，全高4.25m，翼面積34.85㎡，自重6,600kg，総重量9,600～13,500kg。
発動機SNECMAアター9C3（出力4,300kg，アフターバーナー使用時6,300kg）×1基。
最大速度M＝2.2，上昇時間11,000m/3分，実用上昇限度16,900m，戦闘行動半径700㎞，最大航続距離2,160㎞，固定武装30㎜×2，乗員1名。



図①と②　ミラージュ5J。
イスラエル空軍に引渡される予定であった機体の迷彩図で，イエローサンド44＋4とグリーン16＋18＋4＋1およびブラウン17＋3＋4＋1の迷彩。下面はライトブルー20。イスラエルの手に渡らなかったので，想定塗装ということになるが，色調の面白さがある機体に仕上る。
図③　ペルー空軍所属のミラージュ5P。
フランス空軍の迷彩と同様のものと思われ，ダークグリーンとダークシーグレイの迷彩で下面はマットシルバー。アンテナとか機首下の突起部や垂直尾翼に少し差がある。（次ページの写真参照）
図④　スペイン空軍のミラージュⅢEE。塗装はフランス空軍機と同じと推定され，方向舵は白に黒X字である。
ミラージュ5は現在，フランス（62機），ベルギー（106機ライセンス生産），コロンビア（60機），パキスタン（30機），リビア（60機），ペルー（14機），アブダビ（14機発注）で使用中。イスラエルは50機を発注している。

ハイモデリングのための

レベル資料集

ダッソー・ミラージュ5　シリーズ



①

ミラージュ5の写真は非常に少く，資料の少い機体であるが，今月はこのミラージュ5シリーズの特集である。

写真①　リビア空軍のミラージュ5D-。塗装は黄色味の強いオリーブ・グリーンとイエローサンドおよびグレイの迷彩で，下面はライトブルーという，やわらかいトーンの迷彩機。

デラックスな重装備を誇る1/32スケール・キットとして，レベルからミラージュⅢEとⅢRのコンバーチブル・キットが発売中であったが，今回，新しくミラージュ5J/5Fの，やはりコンバーチブル・キットが好評発売中である。武装はさらに強化されており，フランス空軍とイスラエル空軍のマーク付というのも珍しい。



②

写真②　ミラージュ5の搭載ウェポンを示す写真で，主翼に装備しているのはロケット弾36発を発射できる，ロケット弾ポッド兼286英ガロン増槽。機首の前には30mm2門のガンパック（各125発装備）があり，その前は110英ガロン増槽と125kg，250kg，500kgの爆弾群。前方のロケット弾ポッドは18発装備，55英ガロンの増槽兼ロケット・ランチャー。その左右にはサイドワインダーがあり，中央はノールAS.30ミサイルである。

写真③　パキスタン空軍の5-PAで，写真④のコロンビア空軍用5-COAと同じ機首を持つ機体。塗装は両者ともグリーンとグレイの迷彩。コロンビア空軍のマークは方向舵の上から黄，ブルー，赤となっており，胴体のマークは外円上半分が黄，下半分左がブルー右が赤，中の円は上半分の1/2上が赤，ブルーの順で，下半分が黄，中央に白い星があり機体下面はライトブルーと思われる。機体ナンバーは黒。



③



④



⑤



⑥

写真⑤　ベルギー空軍用の機体で，塗装は全面シルバーにミラージュⅢと同ような赤ライン付となっており，垂直尾翼もⅢE等と同じである。

写真⑥　ペルー空軍用５－Ｐ。機首はベルギー用と同じタイプのもので，塗装はグリーンとグレイというフランス空軍用と同じように見える。

（イラストと解説・橋本喜久男）



フランス空軍のミラージュ5F

Mirage 5F of 13EC French A.F.

D4Y4 of No.601 Naval Air Group



艦爆"彗星"33～43型



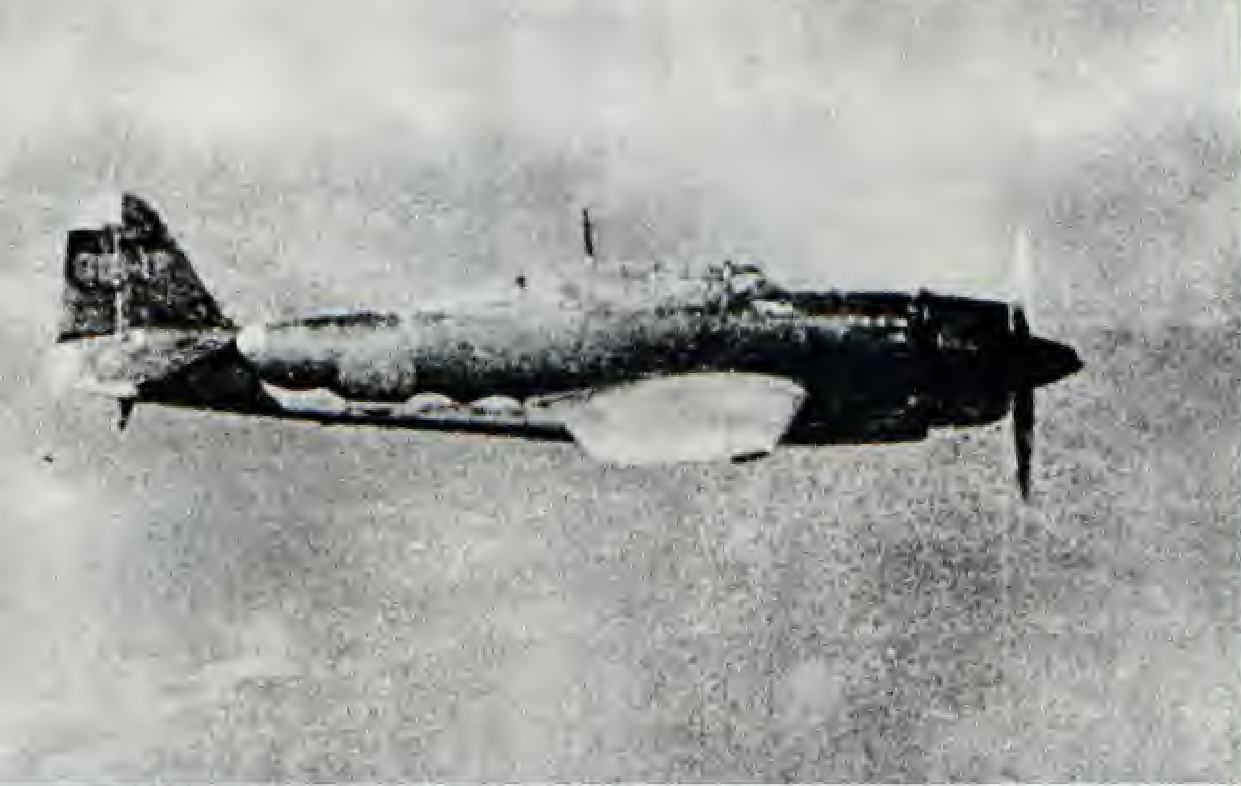


大戦後半に登場した艦上爆撃機"彗星"。今回は空冷エンジンに代えた33型と34型の珍しい写真を特集しました。

13試艦爆"彗星"は制式採用が昭和18年12月。すでに主力空母が失なわれて、艦爆ではあるが、主として陸上基地から発進して、マリアナ方面や本土防空戦に出動した。初期の機体に装備されていた液冷のアツタ・エンジンはダイムラーベンツＤＢ600を国産化したもので、性能はすぐれていたが、振動、爆音不調などと整備上問題が多く、稼動率が低下したため、信頼性の高い空冷の金星61～62型に換装したのが彗星33型（Ｄ４Ｙ３）で、スピードなど性能はやや低下したが、信頼性は格段に向上した。これの防弾を強化して、補助ロケットを装備したのが最終生産型の43型（Ｄ４Ｙ４）である。

（前ページと上）第601海軍航空隊の"彗星"43型。後部風防を金属張りにした単座型の機体である。同航空隊は昭和20年２月から基地航空隊に変わり、百里原で終戦を迎えたが、終戦時には約100機の"彗星"を装備していた。

D4Y3 of No.701 Naval Air Group, July 1945



〔上〕戦争末期に、"彗星"33型として初めて公表された写真。第701海軍航空隊攻撃103飛行隊の所属機で、昭和20年4月末、鹿児島から三保へ基地移動中のもの。



正面から見た"彗星"43型。戦後アメリカに運ばれてテストされた4機の43型のうちの1機。43型は防弾を強化したほか、後席の旋回銃を廃止して、機首に7.7㎜固定銃2挺を装備したが、写真の機体のように、昭和20年4月以降の生産機はこの機銃も廃止した。

D4Y3, evaluated after WWII in America



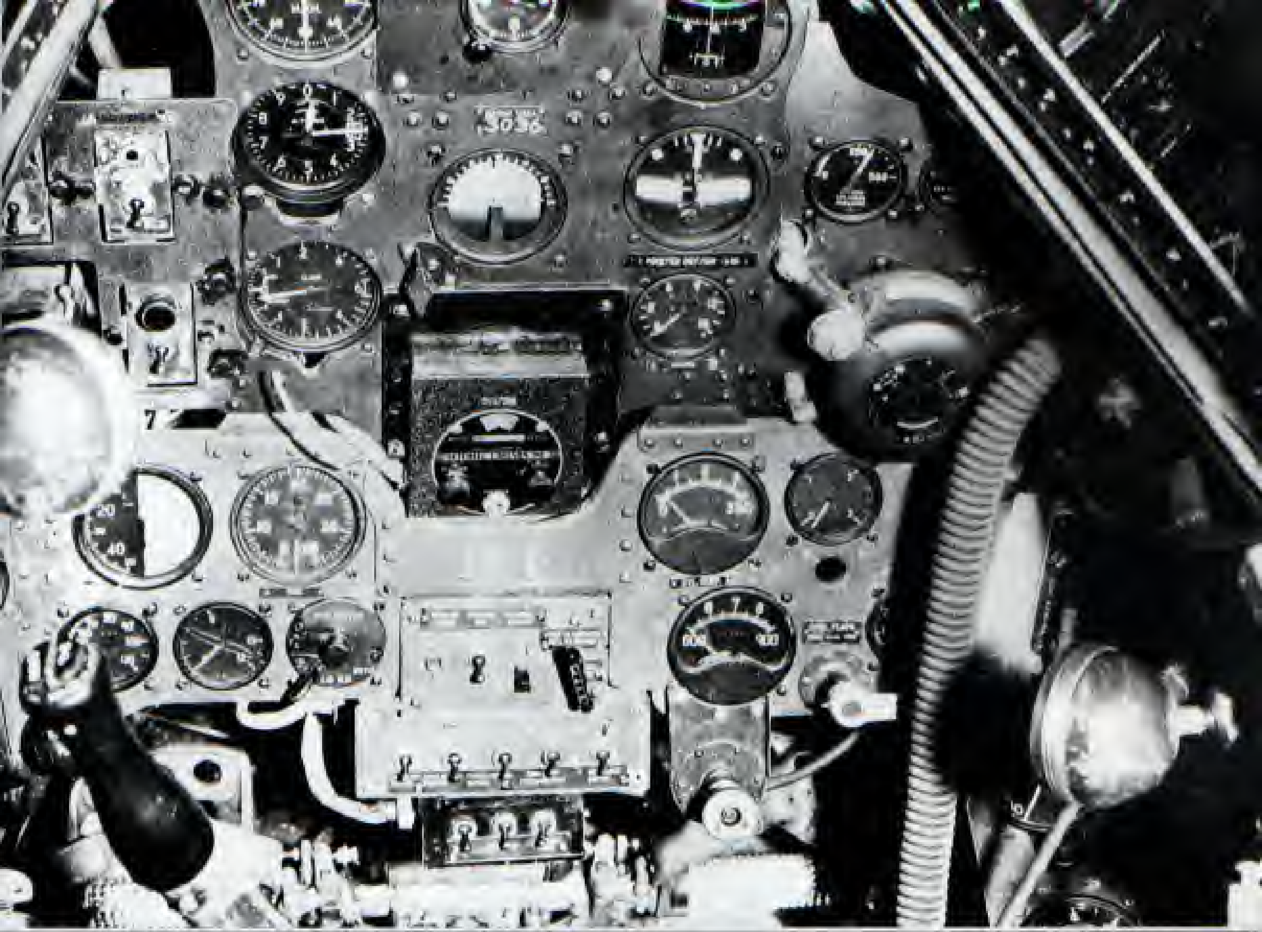
D4Y4 of No. 252 Naval Air Group

〔上〕第252海軍航空隊の"彗星"43型。同航空隊には昭和20年3月、"彗星"を装備した攻撃第3飛行隊が編入され、茂原と館山に展開、同月末にその半数が国分へ進出して沖縄決戦に参加した。写真は千葉県の香取基地上空を飛行中のもの。43型は方向安定を改善するため、のちに垂直尾翼上端部を少し延長したが、写真の機体もその1機である。43型には単座と複座型の2種があるが、写真は複座の機体。胴体下面の爆弾倉の後方が、加速用の補助ロケットを装備するためにくぼんでいるのが43型の特徴でもある。

〔下〕"彗星"33型の1機。33型が実戦部隊に配備されたころはすでに空母がなく、艦上爆撃機から陸上爆撃機に改められた。着艦フックがはずされており、主翼下には250kg爆弾の弾架が見える。

D4Y3. No aircraft carrier existed when this aircraft made its debut, and the carrier-use designed bomber, SUISEI, had no deck-hook. Note the 250kg bomb rack.





↑Front view of the instrument panel, D4Y4 cockpit

〔上〕"彗星" 43型の操縦席内正面の計器板。アメリカに運ばれた1機を米軍が撮影したもので、一部の計器はアメリカ製のものに代えられ、プレートのネームも英文のものとなっている。左下方に傾いた操縦桿、そのかげにギザギザのついたフットバーが見える。計器板は最上段の左側が速度計、その下は高度計、上昇計である。

〔下〕第601海軍航空隊の "彗星" 33型。着艦フックがなく、胴体の日の丸の前方には空母のど真中に命中した爆弾の絵が描かれており、その下方には横に線が一本書かれている。第601海軍航空隊は、終戦直前には "彗星" 約50機を装備した名古屋地区の第3攻撃飛行隊も傘下にしており、写真はそのなかの1機で、終戦後に愛知県挙母基地で撮影したものと思われる。

↓D4Y3 of No. 601 Naval Air Group. Photo taken just after the war somewhere near Nagoya.



陸海軍の秘密航空機 ⑤

ロケット戦闘機
秋水

(本文77ページ記事参照)



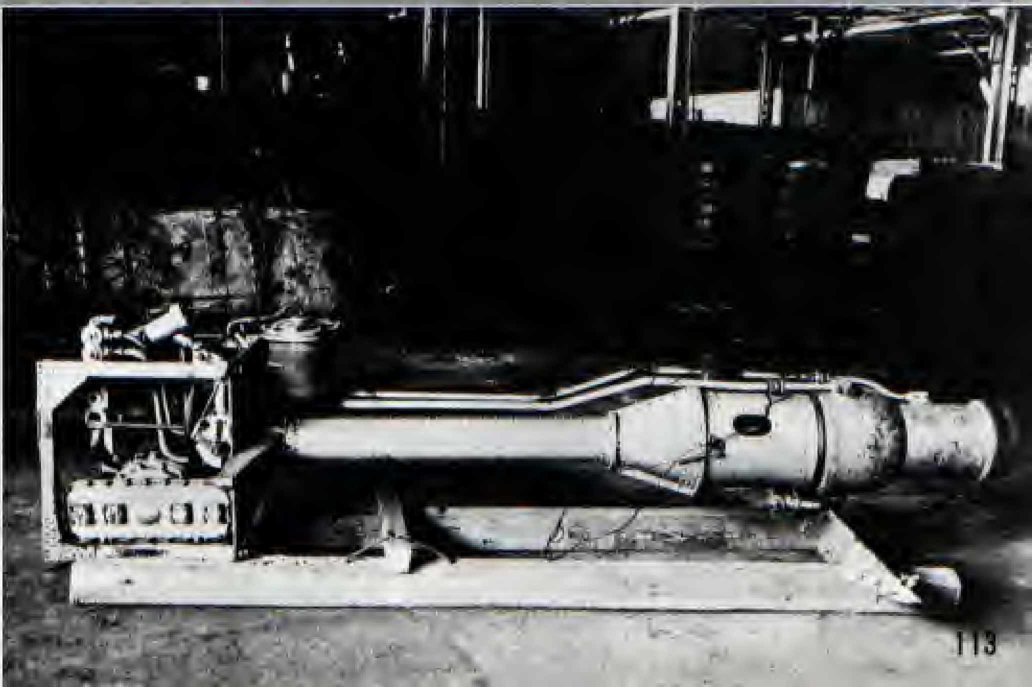
Experimental SHUSUI rocket-powered interceptor fighter







わが国の航空史上ただひとつ試作されたロケット戦闘機、試作局地戦闘機"秋水"（J8M1／キ200）計画は、大戦末期に陸海軍が共同で行なった起死回生のプロジェクトであった。しかし終戦までに完成したものわずかに5機。ドイツのMe163Bに範をとって開発した必殺のB-29迎撃機"秋水"計画はついに実らなかった。写真は戦後アメリカに運ばれた1機と下は同機のロケット原動機。





J2M1 SHUSUI interceptor fighter

Patterned after the German Walter HWK 109-509A, the Toku-RO (KR10) liquid-fuel rocket engine could boost the thickset single wooden winged body up to a 10,000-meter altitude in 3 minutes 32 seconds, and keep it at a speed of 900 km/h at the maximum. The craft, however, could fly only for 2 minutes and 5 seconds at a 10,000-meter altitude with a speed of 700 km/h. The two-wheel gear was used only in taking off, and a sleigh under the fuselage was the device to land for this monocoque structured light alloy monster, SHUSUI. Photos include those taken by the USF at the plant after the war and the first test-plane after it met an accident.





前ページおよび上の写真は、終戦時に工場内で撮影された未完成の“秋水”。進駐した米軍が撮影したものである。

液体燃料の特呂2号（KR10）を動力とした“秋水”は、中翼単葉の無尾翼機。胴体は軽合金のモノコック構造であったが、翼は全木製であった。投下式の双車輪を使って離陸し、燃料を使いはたしての着陸は胴体下に装備しているソリ（写真では引込まれている）を使って行なった。ロケット戦闘機であるため、最高速度は900km／h（高度10,000m）と優速であったが、本文記事にもあるように耐空時間は短く、高度10,000mで時速700kmだとわずかに2分5秒、時速500kmだと4分24秒で燃料を使いはたした。10,000mまでの上昇時間は3分32秒だが、全力で上昇すると燃料がなくなってしまうので、エンジンをしぼって上昇、上空での航続時間をかせがなければならなかった。

写真下は“秋水”の第1号機。初飛行に失敗して墜落したのち、破片や部品を集めて撮影したもの。





SHUSUI in complete scheme

写真上は完全な状態の"秋水"。主車輪と主橇（ソリ）がよくわかる。主車輪は離陸してソリを引込めると同時に落下するようになっていた。尾輪も主ソリと同時に作動する引込式で，すべて油圧で作動した。KR10ロケット・エンジンの燃料は，甲液（濃度80パーセントの過酸化水素）が胴体中央部に，乙液（水化ヒドラジン）は主翼内の4個のアルミニューム・タンクにそれぞれ収納された。左右主翼付根に30mm機関砲（弾丸50発）を1門ずつ搭載している。

写真下は"秋水"の試作にあたって，無尾翼機の操縦性，安定性の研究および搭乗員の練習機として試作された"秋草"（MXY8）軽滑空機。3機がつくられ，1機は陸軍に引渡されている。のちに"秋草"から"秋水"に移る中間練習機として，"秋水"の動力装置，タンク類や兵装をのぞいた重滑空機も三菱で2機つくられて試飛行が行なわれているが，テストの結果，中間練習機の必要はないとして製作は中止された。燃料節約のために，この"秋草"に"初風"エンジンを装備する計画もあった。

Photographed here is the MXY8 SHUSO, a "light glider" manufactured on Dec. 18, 1944, for the purpose of training SHUSUI crew members. Another plan to train SHUSUI crew by a "SHUSUI with no powerplant" — called "heavy glider" — was also in existence.





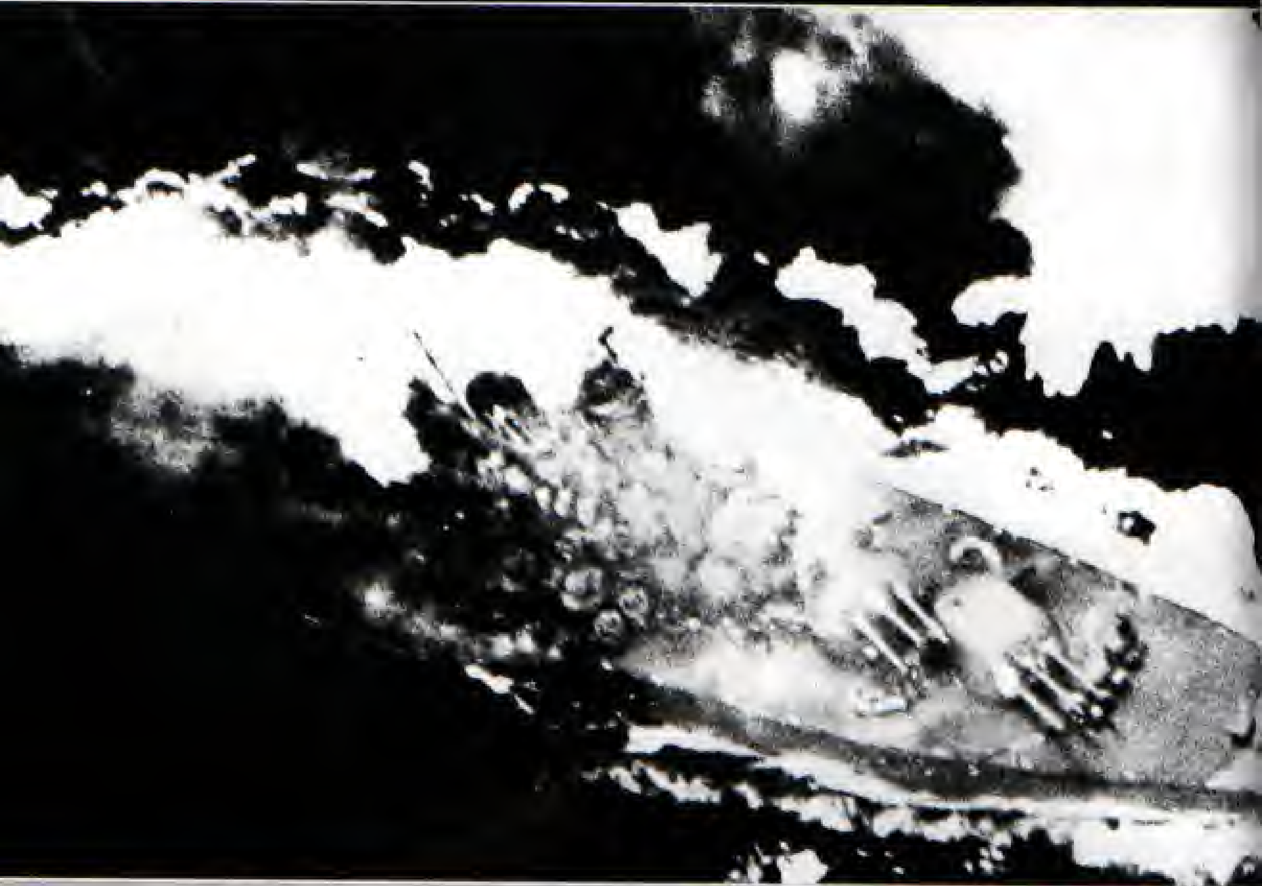
（本文82ページ記事参照）

これが幻の翼 16試陸攻泰山

１式陸攻に代る双発陸攻として、昭和16年に海軍が三菱に研究を命じた16試陸上攻撃機"泰山"（Ｇ７Ｍ１）は、軍側の苛酷な要求に計画は遅々として進まず、昭和17年９月に第１次木型審査を行なったが、その後試作は中止となった。これまでその概要を伝える写真や図面は公表されたことがなく、文字どおり"幻の翼"であったが、ここに紹介するのは、最近確認された同機の模型、初めて公開される同機のプロフィールである。

Experimental 16-shi TAIZAN Attack Bomber

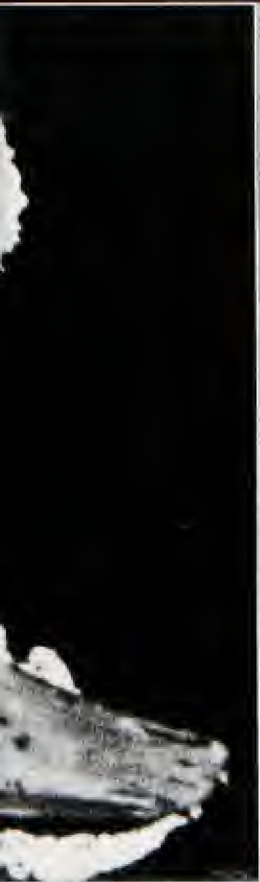




海上特攻"大和"の最期

BB YAMATO in a desperate battle







前号につづいて米海軍航空部隊の攻撃を受ける"大和"特攻艦隊。写真左上は昭和20年4月7日、13時35分ころ、空母イントレピッド各機の攻撃で煙をひきながら蛇航する"大和"。左舷に新しい弾着の水煙りがひとつ。写真左下は空母ヨークタウンの各機に襲撃される"大和"(中央)と右は駆逐艦"初霜"、左は同じく護衛駆逐艦の"冬月"。写真上も同じく爆弾の雨のなかを進む駆逐艦。写真下は、だんまつまの巡洋艦"矢矧"。14時05分、同艦は油紋を残して海中に没した。

本文147ページ記事参照)







イギリス軍にろ獲された Fw190A-3









イギリス軍にろ獲されてテストされたフォッケウルフＦｗ190Ａ-３。英空軍機のマークをつけ、"ＭＰ499"の英軍機のシリアルをつけているが、本機の細部がよくわかる鮮明な写真である。イギリスには現在、Ｆｗ190はＡ-８/Ｒ６とＡ-８/Ｕ１の２機が保存されているが、本機"ＭＰ499"のその後は不明である。

Ｆｗ190の最初の主要量産型がこのＡ-３で、1,700hpのＢＭＷ801Ｄ-２エンジン装備。武装は胴体に7.9mmＭＧ17機関銃２挺（各1,000発）、主翼付根に20mmＭＧ151機関砲を２門（200発）、主翼の主脚支柱付根の外側の部分に20mmＭＧＦＦ機関砲２門（各50発）という強力なものであった。写真は公開で飛行テストが行なわれたときのもの。





前ページにつづいてイギリス軍がろ獲したＦｗ190Ａ-3“ＭＰ499”，前方と後方から見たスナップ。日本の２式単戦に似たアタマでっかちの胴体、地面でこぶしをかためたような“うちまた”ぎみの主脚柱と本機の特徴がよくわかる。上の写真では、主翼外側機関砲の弾倉を収納しているためにふくらんでいる翼下面のバルジ状のでっぱりもはっきりとうつっている。同様に主翼付根上面のふくらみは内側機関砲の弾倉収納部。





エアラインの翼

エール・フランス ⑧



〔上〕胴体を約3.05m延長したボーイング727のストレッチ型.727-200は、1968年からエアラインへの引渡しが始まったが、エール・フランスではカラベルの代替機としていち早く発注、1971年には17機、現在では20機を保有して、ヨーロッパのロンドン、アテネ、マドリッド、リスボンなど各国首都間を結ぶ旅客の過密な路線に飛ばしている。

右 国際路線の主力機ボーイング747。同航空では現在14機を保有、さらに3機を発注している。現在エール・フランスの主要機は、上記の2機種のほかに、B.707が32機、カラベルが32機、A300B2が2機で、発注中の機体はA300B-2が4機、コンコルドが4機である。

ジェット戦闘機の先輩たち

アメリカ陸／空軍 ⑥



ノースロップ F－89 スコーピオン

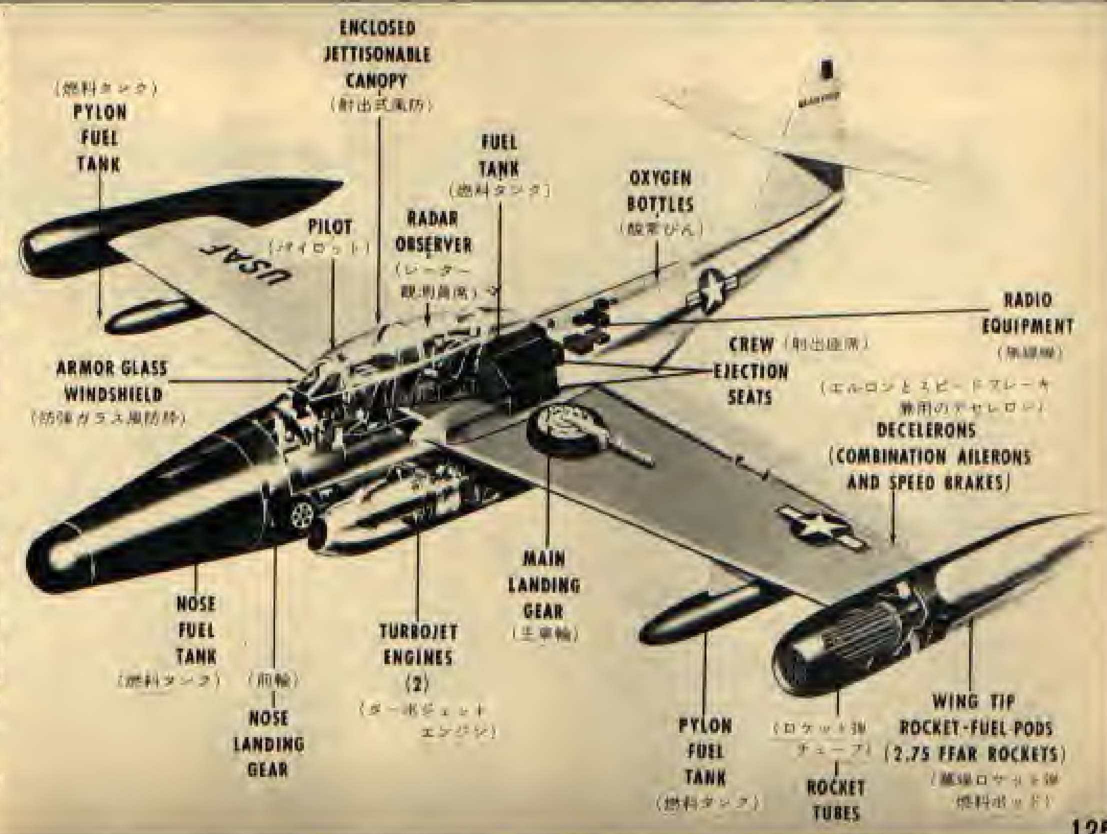
NORTHROP F-89 SCORPION

ノースロップF-89スコーピオンは、アメリカ空軍で最初の複座の全天候戦闘機。オーソドックスな肩持形式の主翼、比較的大型の胴体両側にアリソンJ35エンジン2基装備、大きな風防の下に、パイロットとレーダー手がタンデムに坐った。2機作られた原型のXF-89の1号機が初飛行したのは1984年8月16日、J35A-21エンジン装備の最初の量産型F-89Aが48機、機内の装備品を代えたF-89Bが30機、フラッター対策として尾翼を改修したF-89Cが164機、J35A-35Aエンジンを積んで、燃料タンクを増設した最終生産型のF-89Dが682機生産されている。





写真上と左
は、フラッタ
ーにそなえて、
マスバランス
をつけて尾翼
を改造したF
89C。尾翼の
ほかに、装備
品も大幅に変
えて、吸気口
除氷用のアル
コール・タン
クを新設する
などの改修を
している。こ
のC型から、
翼端タンクに
フインがつけ
られた。
164 機のC
型のうち、最
初の34機はJ
35A-21、30機
が-21A、45機
が-33、55機
が-33Aエン
ジンを積んで
いる。
右はF-89
の構造図。





写真上と下は最終生産型のF-89D。F-89D型でもさらに装備品が新しくなり、燃料タンクも増設して、搭載燃料は862米ガロンとなっている。682機のうち、最初の27機はJ35A-33A（5,505-lb）エンジン、つぎの130機が-41、残りは-35エンジンに換装している。初期の型では、機首に20mm機関砲6門を集めて装備していたが、D型からは、主翼端の大きなポッドに、2.75インチ・ロケット弾104発が標準武装となった。写真上は南カリフォルニア州上空を飛行中。

写真右下は、主翼下パイロンにダグラスMB-1ジェニ一核弾頭ロケット弾を積めるようにしたF-89Jで、1956年ごろからF-89Dのうち350機がこのJ型に改造されている。MB-1ロケット弾2基のほかに、GAR-2A空対空ミサイルを4基装備することができた。写真の機体はその標準装備で飛行中。

F-89スコーピオンは、1951年中ごろからA型とB型が防空軍団に配備され、つづいてD型が1953年から、主翼の武装ポッドを改造したH型が1956年からそれぞれ配備されているが、1957年ごろからF-102に代替された。







右上はF-89Cの三面。F-89Dのデータはつぎのとおである。
機種：全天候迎撃戦闘機。
乗員：パイロットとレーダー手の2人。
エンジン：アリソンJ35A-35(または-33A、-41、-47)440-lb（7,200-lb・アフターバーナ使用）ターボジェット×2。
全幅18.18m、全長16.40m、全高17.87m。自重11,426kg、備重量12,875kg。
最大速度1,023km／h(高度3,230m)、戦闘速度841km／h高度14,173m)。上昇率速度2,547m／分、実用上昇限度4,995m、航続距離2,204km。武装：2.75インチ・ロケッ弾×52。

